



学研・教科の研究

# 体育・保健体育 ジャーナル

2021.4

第12号

Gakken

学習指導要領とこれからの学び

－見方・考え方を身に付ける－ 奈須 正裕 …………… 1

中学校保健体育副読本 新版『中学体育実技』の解説

－授業における活用のポイント－ (後編) 菊 幸一 …………… 4

with Sports 水谷 草人さん スポーツ写真家 …………… 8

体育・保健体育に関する情報や、授業のヒントなどをお届けしてきた『小学校体育ジャーナル』、『中学校保健体育ジャーナル』は、合本となり『体育・保健体育ジャーナル』として生まれ変わりました。小学校、中学校の枠組みを越えて、系統性を踏まえた指導が重視されている今日に対応し、これまでよりもさらに充実した内容で、指導や子どもたちの学びに役立つ情報をお届けしてまいります。

## 学習指導要領とこれからの学び

－見方・考え方を身に付ける－

上智大学総合人間科学部教育学科教授 ● 奈須 正裕 なす まさひろ

令和2年(2020年)度から小学校で全面実施となった学習指導要領は、中学校でも令和3年(2021年)度から全面実施となった。今回の指導要領はどのように改訂されたのか、見方・考え方を身に付けるとはどういうことか、これからの学びはどのように変わるのか。今回の学習指導要領改訂のキーパーソンである奈須正裕先生にお話をいただいた。

※本稿は、2020年12月に学研教育みらい本社で実施された奈須正裕先生の講演内容を、弊社編集部で抜粋、再構成したものです。

### 1 資質・能力の考え方は以前から示されていた

2020年度から小学校で全面実施された新しい学習指導要領は、正式には2014年11月20日の文部科学大臣の諮問を受けて作り始められました。しかし、今回の学習指導要領につながる考え方は、それ以前からあったのです。

例えば、資質・能力については、前回の平成20年(2008年)改訂の学習指導要領(以下、20年指導要領)の総合的な学習の時間において、「よりよく問題を解決する資質や能力を育成」、「育成すべき資質や能力及び態度」という言い方で、キーコンピテンシーと

なぞらえて資質・能力という考え方が示されています。

「生きる力」という言葉が使われた頃から、学力に対する新しい考え方が必要であると言われていました。しかし、「生きる力」の育成を目指した平成10年(1998年)改訂の学習指導要領(以下、10年指導要領)の最大の問題は、新しい学力のためには、どんなコンテンツをどのように並べるべきか、ということについて議論をしないままに、学習内容をおよそ3割減らしてしまったことです。それに対して学力低下の懸念が言われました。

### 2 コンテンツからコンピテンシーへ

20年指導要領では、10年指導要領における学習内容の3割削減等を回復することが求められていました。内容の系統をきちんと作って、学力低下と言われないようにする。そのために重要なのは、学力に対する新しい考え方を出すことでした。

従来、教えるべき事項(コンテンツ)の束が教科に



なっているふしがありました。教科での学びは、その教科の学問の基礎を固めるためのものであり、教科のコンテンツ全てを理解し、習得しようとするものでした。しかし、こうした学びは、ほとんど日常生活では使えません。日常生活で役に立つものにするためには、教科で学んだ内容を概念的に理解し、思考し、課題解決に生かす力を身に付ける必要があります。極端な話をすれば、そのような概念的な理解さえしておけば、細かいコンテンツは覚えていなくてもよいということになるのです。

### 3 コンピテンシーを身に付ける

例えば、中学校の世界地誌。以前は、世界の全地域を学んでいて、「社会科は暗記もの」の典型でした。これを改善するべく、平成元年からは、3地域程度を選んで深く探究することで地理学的な見方・考え方や方法を身に付ける「事例主義」、「方法主義」に移行しました。10年指導要領では、これはさらに徹底されます。例えば、アジアと北アメリカとオセアニアを学べば、それ以外の地域は扱わなくてよいということです。これに対し、アフリカやヨーロッパを学ばなくてよいのか、学力低下になるのではないかと、いった批判が湧き上がります。

しかし、これは学力論が異なるのです。「事例主義」では、例えば、アジアの自然や地形と産業や土地活用について学ぶことで、「港のあるところにはどのような産業が発達するのか」といったことを理解することができる。他の地域でも同様に学ぶことで、そこに共通性と特殊性が見えてくれば、学んでいない地域についても、身に付けた知識や方法を活用して、思考することができるのです。

全地域をコンテンツとして網羅するのではなく、3地域を例として地理学的なコンピテンシーを身に付ける。このように考えれば、コンテンツの量は減らせるのです。

このような概念的理解のために、20年指導要領では、全ての教科において言語活動を充実させることとしました。本当は、他にも盛り込みたいことがあったようなのですが、今回の改訂では、そこをしっかりと進めようということになりました。

### 4 “社会で生きる子供たちに必要な力とは”を考えた

これまででは、大臣からの諮問が出されたら、早々に各教科の部会が立ち上がり、各教科の内容の検討が始

まっていました。しかし今回は、教育課程企画特別部会だけが立ち上がり、そこだけで10か月間も議論を行いました。

まず、20年後やさらにその先の社会が、どのようなものになるのか、その社会で生きる子供たちには、どのような力が必要かということを考えてのです。これが身に付けるべき資質・能力です。その資質・能力のために、何をしなければならないか、学校は何をするべきなのかという議論を行いました。そこから、どのような教育課程にすればよいのかということが出てきます。そして、教育課程を実現するために、各教科での学びをどうするかを検討しました。ここで大事なのは、教科ごとにではなく教科等横断的に考えたということです。そこから、教科等横断的に考えるための「カリキュラム・マネジメント」や「教科等横断的な資質・能力」という考え方につながります。

また、「社会に開かれた教育課程」ということも出てきました。これは、地域社会や企業等に対して開くという意味もありますが、各教科で学んだ力を、社会の中で生きていく際にその子供を支えるものにする、という意味もあります。まさに、コンテンツ主義からコンピテンシー主義へ移行するという話なのです。そのための学び方として、「アクティブ・ラーニング」が出てくるわけです。

### 5 見方・考え方を身に付ける

今回の学習指導要領改訂では、新しいことがいろいろと出てきていますが、このように全ての間に密接な関係があります。また、それらは、これまでのカリキュラムや伝統的な授業に対する不満を整理して出てきたものと言えます。

そうした新しいことを、各教科に落とし込む際に一番大変だったのが、「見方・考え方」です。各教科で多くの教科内容（コンテンツ）を学ぶわけですが、膨大で多様な現象や事物をその教科ならではの見方で眺めていけば、統合的に整理できたり、予測できたり、処理できたりするような概念や方法などを、「見方・考え方」というのです。

実は、歴史的には新しいものではなく、アメリカのジェローム・ブルーナーが『教育の過程（The Process of Education, 1960）』で、構造を大事にするということについて記しています。ここでいう構造とは、細かいコンテンツの骨組みになっているもの、核となる概念や方法などのことを意味しています。

## 6 見方・考え方とは具体的にどういうことか

いくつか具体例を紹介します。

小学校4年の理科の実験で注射器の中の空気を圧縮するというを行います。児童が注射器の中の様子を描く際に、最初の状態と、ギュッと圧縮した状態をどう描くか。空気の粒の数が変わる児童もいれば、同じ数の児童もいます。

ここで教師が、「みんな頑張ってくれてくれたけれど、粒の数が減っている人と、変わらない人がいるね」と投げかけたときに、両方で同じ数の粒を描いた児童が、「出たり入ったりしていないから、粒の数は減らないと思う」と言う。これは質量保存の考え方です。すると、「そうか、出入りが無いのだから粒の数が変わってはいけないのだ」と他の児童も理解する。質量保存という言葉そのものは知らなくても、直感的にその本質的なことは理解する。これが、「見方・考え方」なのです。

次に、算数・数学の集合の例を紹介します。

積み木を仲間分けするという遊びは、幼児期によく行われます。色で分けたり、三角形、四角形といった形で分けたりすることは、幼児でもできます。さらに、赤くて三角の積み木を集めるということもできるのではないのでしょうか。つまり、その子供は、操作的で感覚的ではあるけれども、積集合の考え方を使って仲間分けをしているわけです。

このように、現象や事物を統合的に整理し、処理することができるような、その教科ならではの概念や方法などのことを「見方・考え方」と言います。こうした「見方・考え方」で、知識が構造的、統合的に整理されていくと、初めての場面でも、知識を活用して問題解決することができるようになります。だから、「見方・考え方」が重要なのです。

## 7 コンピテンシー主義へ

今回の学習指導要領では、教科ごとに「見方・考え方」を作っていただいたのですが、「見方・考え方」の水準や書きぶりをそろえることまではできませんでした。10年後の学習指導要領では、その部分をそろえる必要があるでしょう。

また、現在のカリキュラムにおいてはコンテンツがあふれている事情からも、コンテンツをもっと減らさなくてはなりません。もともと、コンピテンシー（資質・能力）主義というのは、コンテンツを減らせるこ

とが一番の利点なのです。つまり、概念が身に付いて能力も身に付けば、網羅的に学ばなくてもよくなるので、2～3割は学習内容を削減できるはずで

す。コンピテンシー主義にして、コンテンツを系統化・構造化し、さらに教科間の連携を進めると、内容や時数は、かなり圧縮できます。そして、圧縮した分の時間を活用して、じっくりと授業を行って頂きたいのです。アクティブ・ラーニングをきちんと行うためには、子供たちがゆっくり考えたり、議論したりすることや、学んだことを発展・応用して何かを作り、表現するという時間が絶対に必要なのです。

学習内容を減らした分、多様な活動を行う。そうすると、子供たちは、学んだことを違う文脈で何度も応用・活用し、自分なりに考え、表現し、あるいは協働で活動するという経験を重ね、さまざまな力がついていく。このように鍛えていくと、結果的にコンテンツもよりよく身に付くのです。

## 8 これからの学び

こうした学びでは、ICTの利活用が非常に重要なものになります。ICTは、個別最適な学び、つまり、個人で使用するのに適していますし、時間や空間が離れた人とのコミュニケーションができるツールとして優れているからです。GIGAスクール構想などで整備されたICTを活用することにより、コンピテンシー主義の考え方に基づいた授業の可能性は、一層広がるものと期待されます。

体育・保健体育においては、言語や思考や知識によって体の動きを調整するということがあるでしょう。これについては、ICTとも相性がよいのです。例えば、跳び箱を行うときにタブレットなどで動画を撮影しておき、あとで見て仲間同士で助言し合うなどということもできます。踏み切りのタイミングが違うことが見られるなど、撮影した動画から読み取って、知識によって少しずつ動きを調整していくことができるようになる。このように、原理を理解してデータで確認し、自己の体の動きを調整する一連のメカニズムは、例えば、将来的に運動・スポーツに触れるといったときにも生かすことができると言えます。

子供のときから、知識やデータに基づいて自分の状況を把握し、自己調整するメカニズムや方法を学ぶことは、体育・保健体育においては大事だと考えます。こういったことについてはまだ、小学校、中学校のどの段階でどうやって組み込むかといった議論は十分にされてはいないことですが、ICTの普及とともに、進めていくことはよいことだと考えます。

# 中学校保健体育副読本 新版『中学体育実技』の解説 —授業における活用のポイント—〈後編〉

筑波大学体育系教授 ● 菊 幸一 まき こういち

## 1 何のための、誰のための活用か

学習指導要領（平成29年告示）で強調されている3つの資質・能力、すなわち「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の育成と「主体的・対話的で深い学び」の実現を具体的な体育実技の授業の中で、どのように意識し達成するのかは、どの中学校保健体育教師にとっても悩ましい課題であろう。今回の新版『中学体育実技』（以下、新版と記す）は生徒たちにとっての副読本ではあるが、指導する側の教師にとっても、指導課題を解決する手がかりや道筋を与えてくれるという意味で、大いに活用ができる内容の工夫が施されている。すなわち、生徒が「学ぶ（学習する）」ことをめぐる内容と方法（道筋）と、教師が「教える（指導する）」ことをめぐる内容と方法（道筋）とが表裏一体となって構成されていることから、双方にとって活用ができる副読本になっているのである。

前回の指導要領から「指導と評価の一体化」が強調

されているが、今回の新学習指導要領においても3つの育成すべき資質・能力との関係からそのことが問われ、体育実技においても、それがどのような場面において具体化されているのかが重要である。新版では、従前から各運動領域の種目の初めに「学習の進め方」として示されている「共通学習」と「選択学習」の目標や進め方が、明確に「○○（種目）の学習の進め方を理解する」（図1）という「思考力・判断力・表現力等」に関わった資質・能力として捉えられていることが活用のポイントの1つである。すなわち、これから始まる単元の学習の進め方を学ぶことは単なる知識ではない。生徒は、どのようにこの単元を学んでいくのかを理解することで、このような単元の学習を積み重ねていくことになる。体育を通した運動やスポーツに対する学習観を思考し、判断し、表現する資質・能力につなげていくことができる重要な学びとなるのである。教師の側からは、各運動領域（種目）の学習を通して、最終的に各学習の「目標」や「ねらい」が達成できたのか、またそのための学習がうまく進められたのかを生徒とともに総括的に評価し、これらの結果を指導に生かすことに活用できるであろう。



図1 「○○（種目）の学習の進め方を理解する」（p.63）

## 2 3つの資質・能力の育成につながる活用のポイント

3つの資質・能力の育成につながる学習について、新版では、次のような赤・緑・青各系による色分けがなされ、各項目が次のように表示されている。

- 1) 「知識・技能」…赤系  
…「技術を知る・身に付ける」「戦術を選ぶ・深める」
- 2) 「思考力・判断力・表現力等」…緑系  
…「ルールを工夫する」「練習を選ぶ・工夫する」
- 3) 「学びに向かう力・人間性等」…青系  
…「みんなで共に楽しむ」「マナー・安全・フェアプレイ」



上記の資質・能力がどのような学習に関わって育成されているのかについて、例えば球技におけるサッカーによって示してみることにしよう(図2)。

新版では、「ゲーム①」としてフットサルが示され、今できる力でサッカーにつながるゲームの学習が内容となっている。そこでは、まず今できる力でゲームを楽しむためには、どのように「ルールを工夫する」のかが示され、「フットサルの基本ルール」との比較からそれを生徒自らが思考し、判断することができるようになってきている。このことから、現在の自分たちの力でできるゲームを楽しむ(集団での競い合いを楽しむ)とともに、その結果から自分たちのチームの

「課題を見つける・話し合う・伝える」ことがチームの課題(「チームの長所と課題」と個人の課題(「自分の長所と課題」)として出てこよう。大切なのは、ゲームを思う存分楽しむことの中から、このような課題が自発的に生まれてくるゲームになっているのかどうか、あるいはそのようになるためのルールの工夫がなされているのかどうか、ということでもある。したがって、このような「課題を見つける・話し合う・伝える」といった学習は、翻って、当初のゲームが自分たちの現在の力で競い合うことを楽しむことができるよりよいルールになっているのかどうかを問いかけ、これに基づいてルールの改善や工夫を行う学習、すなわち、どのようなルールが適当かを思考し、いくつかの案の中から選ぶよう判断し、なぜそのように判断したのかを表現するという資質・能力を育成していく学習にもつながっていくことになる。

他方、ゲーム中に発揮される個人技能の課題も、具体的な「攻め方」や「守り方」の中で意識されることになる。しかしながら、ともしれば

ゲームに夢中になるあまり、ゲーム後に個人技能の課題が意識されない場合もあり得るであろう。これを生徒にあらかじめ意識させたり、あるいはゲーム後に振り返らせたりするためには、ゲーム中における「攻め方ポイント」や「守り方ポイント」を知っておき、実際にゲームを行ってみてその知識が技能として発揮されたのかどうかについて、知識と技能とを常にセットにして考えることが重要であろう。新版では、そのための動きのイメージとポイントが、下記のフットサルの事例のようにわかりやすく示されており、このような示し方が他領域(種目)の単元や各学習の段階においても共通になされている。

**共通学習 [1]** **ねらい 1** チームやルールに慣れながら、初歩的なゲームを総当たり戦で楽しむ。  
 学習の道筋 **ゲーム**→課題を見つける話し合う伝える **ゲーム**→課題を見つける話し合う伝える **ゲーム**→課題を見つける話し合う伝える

**ゲーム① フットサル** コミュニケーションをとり合い、空いているスペースを攻めたり、積極的にボールを奪ったりして攻防を楽しむ。

**ルールを工夫する**  
 ●チーム人数 出場は5人(ゴールキーパー1人)。人数が多いときは、随時交代する。  
 ●フィールド 縦30~40m×横20m  
 ●ボール フットサル用のボール  
 ●時間 前半10分間・後半10分間。  
 ●得点 1ゴール1点。  
 ●審判 審判を付けず、自分たちで目利しながにゲームを行う。

**フットサルの基本ルール**  
 ●フットサルの基本ルールはサッカーを5人、交代はゲーム中何回でもできる。  
 ●ピッチとゴール…ハンドボールとほぼ同じ大きさ。  
 ●ゲーム時間…前半・後半各20分(プレイングタイム)、ハーフタイム15分以内。  
 ●ボール…サッカーボールより小さく軽く、パウンドが小さい。コントロールしやすいのが特徴。  
 ●キックイン…サッカーのスローインの役割。ボールをタッチライン上に置いてピッチ内に蹴り入れる。  
 ●オフサイドルールがない。

**攻め方ポイント ①** シュートが打てる位置に動く。  
**攻め方ポイント ②** ハスやドリブル、体を使ってボールをキープ。  
**守り方ポイント ①** マーキング相手とゴールが、同時に見える位置に立つ。  
**守り方ポイント ②** ボール保持者のマーク。  
**攻め方ポイント ③** ハスが受けられる位置に動く。  
 ●数字=ボールを持つ動き  
 ●数字=ボールを持たない動き  
 ●パス  
 ●ドリブル  
 ●人の動き

**課題を見つける話し合う伝える**  
**自分の長所と課題**  
**チームの長所と課題**  
**チームで話し合おう** どんな課題があるのか。課題を解決するために、どんな練習をするか、など。

152 **オリンピック Quiz** サッカー男子日本代表チームがオリンピックで初のメダルを獲得したのは、1968年のメキシコシティー大会の銅メダル。銅メダル以外にも、ユネスコやFIFAから賞が贈られた。(答え p.167)

図2 「ゲーム① フットサル」(p.152)



また、フットサルのゲーム①では、個人技能として狭いコートの中で「近くの味方に正確にパスを出すキック」が要求される。このようなゲーム特性に基づく要求＝目的、に応えるという知識と、それに結びつく技術としての「インサイドキック」をどのように技能として発揮すればよいのかという知識が、実際のゲームにおける技能の発揮に役立つことになる。当然のことながら知識があっても（わかっている）技能が思い通りに発揮できない場合もあれば、その逆もあり得る。いずれにしても、そのギャップを埋めること自体が「知識・技能」に関わる資質・能力の育成にとっては重要であり、新版における「技術を知る・身に付ける」活用のポイントは、このギャップの解決を促すことにこそある、と考えられよう(図3)。



図3 インサイドキック「技術を知る・身に付ける」(p.153)

「学びに向かう力・人間性等」に関する資質・能力については、先に述べた各単元の学習の進め方を理解する学習において「マナー・安全・フェアプレイ」という青系の囲み欄を設けて、それぞれの単元内容に応じた留意点が示されている。ややもすると、このような資質・能力の示し方は、実技学習とは別の扱いで、いわば指導一辺倒の「道徳的」な注意になりがちであるが、このような資質・能力こそ、実際のゲームにおける技能の発揮やルールあるいは練習の工夫場面で、生徒自らがその必要性や重要性を考え（思考し）、そのよし悪しを判断し、それを相手に伝える（表現する）といった資質・能力につなげていくことが大切であろう。また、各種目の扉写真に、障害者による同じ種目場면을掲示して「みんなで共に楽しむ」イメージ

が具体化されるように工夫されている。このようなイメージをもとに、自分たちの授業の中で、運動の苦しい生徒と「共に楽しむ」にはどうしたらよいのか、という課題と結びつけて考えさせることも、「学びに向かう力・人間性等」の育成からみた活用の重要なポイントとなるように思われる。

### 3 「主体的・対話的で深い学び」につながる活用のポイント

「主体的・対話的で深い学び」については、すでに本ジャーナルの前号(11号)で、これを単なる学習方法の問題ではなく、学ぶ主体である子どもからみた学習の意味や価値の探究から出発する学習観の問題として捉えることが大切であることを指摘した<sup>1)</sup>。その意味では、これまでも『中学体育実技』において、「今の力を確かめながら」、「学習の見通しをもって」みんなと一緒に基本的な技能を生かして楽しむ共通学習(第1学年及び第2学年)と、「自分に合った運動やスポーツを選び、学習を深めて楽しむ」選択学習(第3学年)とに分けて、主体的な実技学習が実現されるよう学習の進め方を工夫してきていると述べた<sup>2)</sup>。新版においては、これまで本稿の冒頭で解説したように「〇〇(種目)の学習の進め方を理解する」ことが、全体の単元学習への理解を通じて主体的な学びの契機となり、3つの資質・能力を育成するための工夫がこれを促していくということから、この側面をさらにバージョンアップしたものになっている。

したがって、先に紹介した「課題をみつける・話し合う・伝える」項目の自由記述欄にどの程度の内容がどれだけ話し合われたり、書けたりしているのか、また自らそれらの内容を書き留めたいと思うのが、主体的で深い学びの状況を表わしているといってもよいだろう。また、本欄を活用することは生徒にとっての学びを促し着実なものにするだけでなく、教師にとっても指導の手がかりとして活用できるはずである。

また、新版では、個人種目を中心とした運動領域(器械運動、陸上競技、水泳など)において、「自分の動きと対話しよう」というコーナーが設けられてお

り、「技術を知る・身に付ける」過程で自分の動きを自己評価するため、自己との対話を引き出す具体的な問いかけが示されている。例えば、陸上競技の中距離走では、「決めたペースで走れている?」、「腕はリズムカルに振れている?」、「リラックスして走れている?」といった問いかけが設定され、自己の動きとの対話的な学びを促すことができる。これをさらに深く追求していくと、呼吸の仕方の重要性に気づくことにつながる（深い学び）から、「active! ココをチェック」というコラムが設けられている（図4）。



図4 中距離走「技術を知る・身に付ける」(p.69)

これまで個人種目を中心とした運動領域における「知識・技能」の学習では、どちらかと言えば「できる」、「できない」の結果だけに気を取られて学習が停滞する傾向が否めなかった。これに対して新版では、自分の動きをチェックするポイントに目を向け、自己との対話を促すことによって、主体的・対話的で深い学びを導き出すような活用の仕方が意図されているのである。

その他、先に示したフットサルのゲーム図（図2参照）に描かれたプレイヤーの言葉かけ（吹き出し）に注目すると、実際のゲーム場面では、具体的にどのようなアドバイスがなぜ有効なのかを考えるヒントとなる。このような表現の仕方をゲーム場面に応じて具体的に工夫しようとすることは、対話的で深い学びを実現するための活用の仕方として有効であろう。また、運動の苦手な生徒へのアドバイスをわかりやすくした「つまずきQ&A」も、生徒同士の対話的な学びを促す知識として活用するポイントとなると考えられる。

## 4 紙媒体としての新版の活用法 — デジタル教材との関係から —

新型コロナウイルス禍での体育実技では、従来の対面授業に代わってオンラインで授業が展開されるケースが多くなっているようである。ここで一気に、従来から文部科学省が推進しようとしてきたICT（Information & Communication Technology）活用が、体育実技の授業教材としても増えてくることが予測される。具体的には、タブレット端末によるビジュアル学習の展開が本格化することであろう。確かに、ビジュアル（見て感じる）に訴え、これを自分の都合で繰り返し見ることができる学習は、実技学習にとってそれなりの効果を発揮すると思われる。

しかし、視覚情報の動画で見て知ることは、あくまで部分的な情報（information）の範囲でしか知ることにはしかないのではないかと。これを学習化していくためには、本稿の冒頭でも述べたように、学習主体である生徒一人ひとりがそれ（例えば、技術）を自らの問いを伴った「知識（knowledge）」として理解していかなければ、「主体的・対話的で深い学び」にはならないし、3つの資質・能力につながる汎用性を伴った学びにもつながっていかないと思われる。つまり、紙（読んで見る）媒体による学習は、単元全体の学習の見通しを共通に学びつつ、知識と技能との関係を問いによって結び付けることで、デジタル化された視覚情報を知識化し、これらをじっくりと考えたり（思考したり）、確認（判断）したりする「ゆとり」をもたらすのではないかとということである。これまで述べてきた新版の活用のポイントとその背景にある意図を踏まえながら、デジタル教材を相乗的に活用することで、さらに紙媒体としての新版の活用が促されることに期待したい。

### 【参考文献】

- 1) 松下良平 (2019) 思想なきアクティブラーニングを転換する。体育科教育, 67 (11):13-17. 大修館書店。
- 2) 菊幸一 (2021) 中学校保健体育副読本新版『中学体育実技』の解説—新学習指導要領改訂のポイントから— (前編)。体育・保健体育ジャーナル, 11:1-3. 学研教育みらい。



with Sports 「スポーツと生きる人」から、スポーツの今とこれからを知る

## 水谷 章人さん

日本スポーツ写真協会会長、日本写真家協会監事、JCII水谷塾塾長

人間の肉体の美しさ、躍動感、限界に挑むアスリートの眼差し……。スポーツの数々の名場面において、私たちの「記憶に刻まれた一瞬」は、時間が過ぎても色褪せることがない。その「一瞬」を50年にわたり撮り続けているのが、スポーツ写真家の水谷章人さんだ。カメラのファインダーを覗くその目に何が映っているのか、一流とは何か、そして後進への指導にかける想いを語ってもらった。

取材・文／荒木 美晴

オリンピックや世界選手権など、80歳を迎えた今なおあらゆる競技、そしてアスリートを撮り続けるスポーツ写真家の第一人者。水谷さんと写真の出会いは、24歳のとき。大学中退後に新たな道を模索し、写真の専門学校に入学した。「一流になれ」という教えのもと、学びに没頭し、卒業した年にデビューを果たした。すぐに山岳やスキー写真の表現力が国内外で高く評価され、広くその名が知られることとなった。

カメラの性能は日進月歩で向上しており、よい機械を持てば誰もが撮る程度はうまく撮ることができる時代。だが、動きのあるスポーツの一瞬を切り取るのはプロであっても極めて難しく、「10年撮り続けて一人前」と言われる厳しい世界だ。——その中で生き残るのはどんな人か？スポーツカメラマンと写真家の違いは何か？素朴な疑問を水谷さんにぶつくと、こんな答えが返ってきた。

「一流」とは、「一人前」になってから真摯に努力を積み重ねてはじめて、周りが与えてくれる称号です。そういう人は技術も、信念も、美意識も、人間性も持ち合わせている。それから日本の場合は、スポーツの撮影は「記録・報道」が基本になっています。新聞社や出版社の社員は職業カメラマンとして媒体（メディア）のために撮るといふ使命がある。それに対して、スポーツ写真家は、作家として人々の記憶に残るこの一枚という「作品」のために撮り続ける。記録と記憶、少し意味合いが異なるんですね」

写真で物語を紡ぐ作家になるには、想像力や企画力も求められる。当然ながら、撮影する競技の特性、選手の性格や癖も知る必要があり、水谷さんは「選手と信頼関係がなかったら、いい写真は撮れない」と言い切る。

「スポーツってある意味、人生の縮図みたいなところがあるでしょう。成功するか、失敗するか。記録を作るか、作らないか。彼らが陰でどれだけ努力して鍛錬しているか、そのアスリートの人間ドラマを掘り下げ、本質を引き出し、肉体だけでなく心理・心情も捉えて表現していくのが、私の仕事だと思っています」

水谷さんは、後進の指導にも力を入れる。「スポーツ写真の将来のために後継者

を残さないといけない」と、2001年、60歳でスポーツ写真プロ育成セミナー『JCII水谷塾』を立ち上げた。この20年の間に弟子は10名、卒業生は90名にものぼり、多くの教え子が第一線で活躍中だ。その指導のかたわら、中学生以下を対象にした写真教室も開く。「もしスポーツに興味があるなら、反射神経や動体視力を身に付けることが大事になるから、カメラを持つ時期は早いほうがいい。でも、何を撮ってもいいんだよ。花でも、人物でも。一番大切なのは、子どもが持っている関心やよいところを保護者がちゃんと見出してあげること」と、子どもの無垢な心を育む周囲の大人の在り方にも注視する。



それは学校教育に対しても同じ思いだという水谷さん。「写真が好きな先生が写真部顧問だったら、子どもたちは本当に上手になる。先生のわくわくした心や熱心が、生徒たちに反映するんだよね。失敗したっていい。一枚を思って撮ればいい。何を撮るにも思いのままにシャッターを切ることが楽しいんだ、ということも、どうぞ先生が教えてあげてください」と、メッセージを送る。

昨年末、ライフワークとしていた雑誌連載の仕事は「やりきった」として、全て終了した。「最近ではもう、撮りたいと思ったものを、撮りに行くスタイル」と笑う。直近では好きな相撲やボクシングを思う存分撮ったそうだ。それでも、向上心が尽きることはない。今でも他ジャンルの本を読んだり、映像からアングルやポジション、表現力を取り入れたり、学ぶ姿勢を忘れない。生涯現役を貫く水谷さんは、写真を通して一流の矜持を私たちに教えてくれる。

### PROFILE ● みずたに あきと

長野県出身。1965年に東京総合写真専門学校を卒業後、30歳のときに富士フォトサロンで個展「限界に挑むスキー」を開催。粒子の粗いスキー写真が評判となり、これをきっかけにさまざまなスポーツの一瞬を切り取る作品を雑誌や写真集等で発表。現在も後進の育成に携わりながら、現場の最前線でカメラを構える。主な受賞歴に講談社写真文化賞（1981年）、第4回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞功労賞（2012年）など。



### 学研・教科の研究

### 体育・保健体育ジャーナル

第12号

『小学校体育ジャーナル』（通巻99号）

『中学校保健体育ジャーナル』（通巻125号）

令和3（2021）年4月発行

発行人…甲原洋

編集人…木村友一

発行所…(株)学研教育みらい

デザイン…宮塚真由美

表紙オビイラスト…丸山誠司

印刷所…(株)廣済堂

●お問い合わせは、「小中教育事業部」へ 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル 内容については▶TEL. 03-6431-1568（編集）

それ以外は▶TEL. 03-6431-1151（販売）

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

●「体育・保健体育ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。



※この冊子は、環境に配慮して作られた紙、植物油インキを使用し、CTP方式で印刷しています。

9300006520